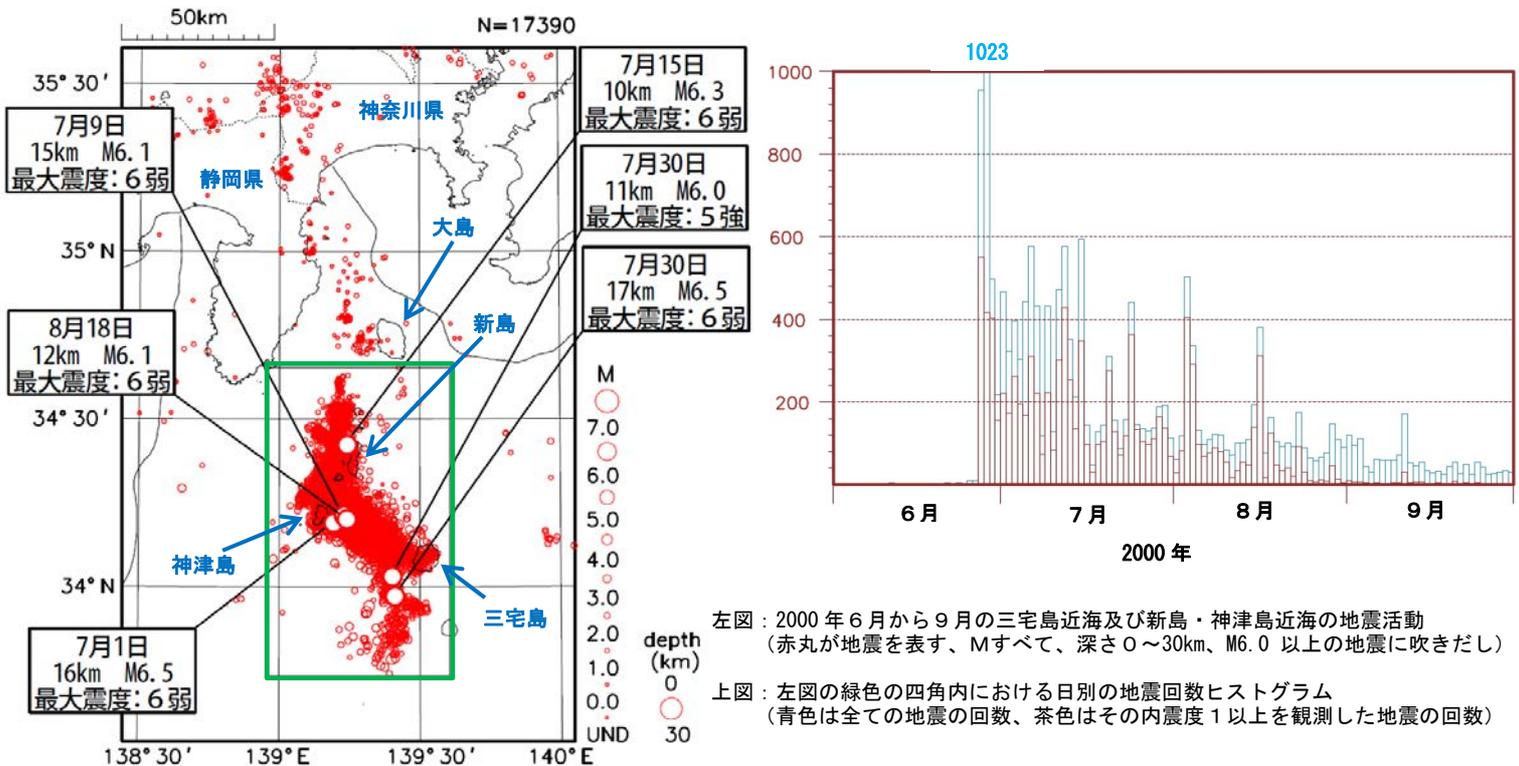


「群発地震」という言葉

ある地域で際立った大きな地震（本震）がなく地震が多発する状態が続くことがあります。一般的に、このような地震群が「群発地震」と呼ばれます。地震群を構成する地震の規模が大きい場合はもちろんのこと、たとえ被害を及ぼさないような規模の小さい地震であっても、頻発している場合、短期間で断続的に揺れを感じる場合、及び活火山付近を震源として発生している場合には、地元住民の不安や注目度は大きくなります。そのような状況があるため、気象庁では、「群発地震」という用語の社会的影響の大きさを考慮し、地震群の規模がある程度大きく、単位時間当たりの発生頻度が高い場合に限り、「群発地震」という言葉を使用することとしています。 実例として、気象庁は、昭和 40 年（1965 年）から始まった松代群発地震、昭和 53 年（1978 年）から始まった伊豆東部の地震活動、平成 12 年（2000 年）に発生した三宅島近海及び新島・神津島近海の地震活動を「群発地震」としています。

2000 年に発生した三宅島近海及び新島・神津島近海の地震活動（下図）では、その年の 6 月から 9 月までの 4 ヶ月間で震度 5 弱以上を観測する地震が 30 回発生しました。その間の 7 月 8 日には三宅島雄山が噴火し、その後もたびたび噴火を繰り返したため、9 月 2 日に全島民に島外避難の指示が出され、帰島できたのはおよそ 5 年後の 2005 年 5 月でした。一連の地震活動により、死者 1 人、負傷者 15 人、住家全壊 15 棟、土砂崩れ 138 箇所などの被害を生じました（「日本被害地震総覧」による）。



「群発地震」は比較的短期間で終わってしまうものもあれば、1965 年から始まった松代群発地震のように 2 年から 3 年以上も続く長期のものもあります。また、1978 年から始まった伊豆東部の地震活動のように 2~3 年に 1 回の頻度で繰り返し起こるものもあります。内陸で起こる「群発地震」は浅い所（深さ数 km）で発生する 경우가多く、震央付近では地鳴りが聞かれる場合もあります。「群発地震」は地殻構造が著しく不均質な地域（火山地帯など）に多いとされ、火山活動に関連して「群発地震」が発生する例も少なくないのですが、その発生機構については詳しくわかっていません。